

## 2) 海洋文化資料の管理保存に関する調査

木下靖子<sup>1</sup>・板井英伸<sup>2</sup>・仲松由美子<sup>1</sup>

キーワード：海洋文化、海洋文化館、資料管理保存技術、資料調査、データベース

### 1. はじめに

本事業では、海洋文化館の展示・収蔵資料の保存管理方法、修復方法を確立するために、館内環境（温度、湿度、冷却装置・サーキュレーター等の機器の使用）について記録を取り、温湿度の変化による資料への影響、状態を観察、調査分析を行った。分析結果により、カビ発生等を予測し事前の対応を行った。また、海洋文化館の展示・収蔵資料に関する学術的調査を実施した。アーカイブ（資料リスト）の整理を継続して行った。

### 2. 海洋文化資料の管理保存に関する調査

#### 1) 海洋文化館収蔵資料の状態調査

海洋文化館収蔵資料の状態調査（年2回）を7/22、2/27に実施した。これまでの調査により、過去にカビ発生、一部剥落・破損などを経過している資料については要注意・危険収蔵品リストを作成し、重点的に状態確認を行った。同時にアーカイブ（資料リスト）の誤記載に関する点検、修正を行った。

#### 2) 温湿度観測データの分析

展示室及び収蔵庫内の温湿度の環境調査を行った。

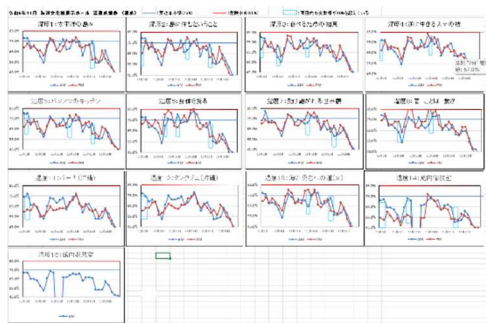


図-1 館内の温湿度推移管理データの一部

館内・収蔵庫内の朝夕の温湿度観測データを集積（図-1）、毎月3期間（上旬、中旬、下旬）に分けて分析し、状況の記録と環境改善対応を行った。これまでの分析により、カビ・害虫の発生、資料劣化を予測する要注意水準（温度 27℃以上、湿度 75%以上）、危険水準（温度：28℃以上、湿度：85%以上）を設定し、水準を上回る場合、施設管理担当と連携し冷気導入による室内温度の調整により高湿度を抑制した。温湿度の調整が必要な数値を示す計測点が

ある展示エリアには、小型のサーキュレーターを配置するなど、数値を元に戻すための対策を行った。結果として、カビが木製品の収蔵品に一部発生することはあったが、局所的にとどまり、大規模な発生は引き起こさなかった。

### 3) カビ・害虫発生への対処

展示収蔵品にカビや害虫の発生、剥落・破損等の異常があった場合適宜対応を行った（表-1）。

表-1 異常発生と対応

	対応	対応
4月5日	アジェ(サメ皮両面太鼓)剥離	資料の状態、展示環境の湿湿度を確認
5月4日	バヌアツのインスタントラーメン外装の破損	調査を行い代替資料を購入
7月14日	リエン・ポロワット号展示台破損	応急処置
7月22日	木製深鉢カビ発生	エタノールで拭き取り
8月5日	木製深鉢カビ発生	エタノールで拭き取り
9月1日	タヒチ戦闘用カヌーカビ発生	エタノールで拭き取り
9月22日	片面太鼓カビ発生	エタノールで拭き取り



写真-1 タヒチ戦闘用カヌー カビ拭き取り作業

害虫については発生場所がわかる場合はその資料の隔離を行い、死骸については種類の同定を行い記録した。カビについては軽微なものは不織布にて拭き取り、菌糸の拡大が見られるものについては不織布に70%エタノール水溶液を浸潤させ拭き取りを行った（写真-1）。

### 3. 海洋文化資料に関する調査

#### 1) データベース作成に関する調査

展示品図録の作成、データベース作成に向けての調査を行った(写真-2)。11月20~21日、国立民族学博物館にて開催された、第1回海域東南アジア・オセアニアの樹皮布とバスケットリー研究会に参加、発表を行った。研究会では、編む・織る・叩くといった加工をほどこして作成した広義にバスケットリーに分類される民具(布類、樹皮布、カゴ類、網類)に関する収蔵資料の分類について議論を行った。例えば、カゴ状、袋状の形態をした漁具(カゴ罟、漁網、帆)を、その形状からバスケットリーというカテゴリーに分類することにより、地域、作り方、道具としての比較研究ができる可能性があり、研究者向けのアーカイブとして意味があるなど、資料を保存管理する施設として新規のデータベースを作成する際の分類方法の可能性について確認、検討することができた。研究会の参加は、海域アジア・オセアニア研究プロジェクト(MAPS)国立民族学博物館拠点より招待を受けた。



写真-2 国立民族学博物館収蔵庫熟覧

#### 2) 資料の修復・保管に関する調査

11月20日、国立民族学博物館の収蔵庫にて、19世紀後半~20世紀初頭のジョージ・ブラウンコレクションをはじめとする古い年代のオセアニア地域の樹皮布を熟覧した(写真-3)。大型の樹皮布の保管取り扱いについて担当者から話を聞くことができ、資料の保存、修復に関する技術について知見を得た。

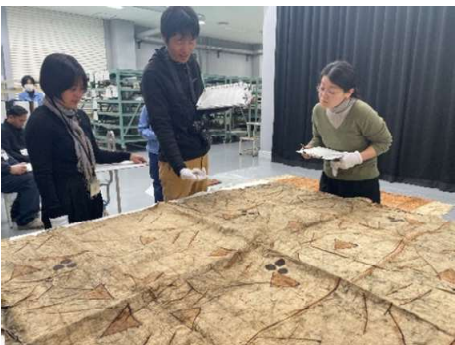


写真-3 国立民族学博物館収蔵庫  
ジョージ・ブラウンコレクションの樹皮布

海洋文化館展示室の「現在の食文化コーナー」において、バヌアツのインスタントラーメンの袋の破損が確認された。平成25年リニューアル時に収集者であった野嶋洋子氏(アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI))に連絡を取り、再収集、購入する際に考慮すべき条件を聞き取り、検討を行った。条件に合う展示品相当の海外製のインスタントラーメンを探し、海洋博公園管理センターと連携、購入、展示をすることができた(写真-4)。



写真-4 新規購入し展示替えた資料の  
インスタントラーメン(右下)

### 4. 外部評価委員会コメント

海洋文化館もリニューアル完成後10年が経過し、資料の保存状態に各種問題が生じていることが理解できた。その問題に対し随時適切な対応が取られ、国立民族学博物館から知見を得るなどしている姿勢は望ましいと判断される。2026年度から近年の間に、個々の問題に対応するだけでなく、長期的なビジョンを得るための、専門家の検討委員会などを立ち上げる時期に来ているのではないかと。また従来の民具カテゴリーを超えて「バスケットリー」という項目を、編む・織る・叩くという制作動作を軸に比較する研究は多いに進展が期待される。

(後藤顧問: 南山大学人類学研究所特任研究員)

海洋文化館収蔵庫・展示室の資料状態調査を行い、カビ発生や破損資料のリストを作成し、それら資料の修復処置を行った。収蔵・展示品にカビが発生しているが、これは温湿度の水準(27°C、75%)の設定に要因があると思われるので、専門業者と相談し、局部対応ではなく収蔵庫・展示室全体のカビ発生防止の環境対策を講じた方が良い。展示品図録やデータベース作成の手法修復のため、国立民族学博物館のプロジェクト参加し、データベース作成における収集品(布類、樹皮布、かご類、網類など)の分類方法に議論し、新たな基準の可能性を確認した。また、同館で100年以上前に収集された大型樹皮布を熟覧し、資料の保存・修復についての知見を得たとのこと。他機関のデータベース作成や収蔵方法に関する調査の実施は評価される。

(須藤顧問: 堺市博物館館長)